企画展余話

香蘭社製コンロ
（田中直良氏寄贈）

企画展会場風景

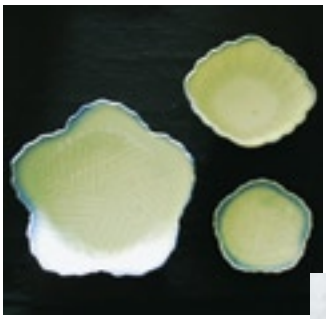
11月26日㈬まで開催した開館30年企画「守り抜かれた伝統~戦時中の有田焼」展は、町内外の方々に来館いただきました。特に町内の窯元の当主やそこで働く職人さんたちが何度も足を運び、1つ1つの作品を熱心に見ていました。

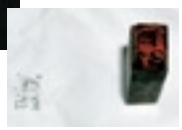
企画展開催に際し、関係者による座談会(次頁参照)や、館の周辺の紅葉ライトアップと夜間開館などを開催しましたが、いずれも多くの方々に参加いただき、ありがとうございました。

今回展示した昭和17年ごろの有田焼120点は、所蔵者である名古屋市の日本陶業連盟へ返却しましたが、企画展開催前や会期中に、様々な情報が当館へ寄せられました。中には「戦時中の焼物が家に残っていた」と持参し、ご寄贈いただいたものがありました。

そのいくつかをご紹介します。

前号の館報で企画展の開催を知ったという、大樽の田中直良さんからは未使用で保存されていた、戦時中の代用品である陶磁器製のコンロをいただきました。香蘭社で作られたもので、記録の中ではよく知られた製品でしたが実物は今回初めて目にしました。





統制番号「有 21」が記されていた製品とゴム印（それぞれ藤巻製陶所寄贈）

また、外尾山の藤巻製陶所の藤本覚司さんから、倉庫の奥にあったのでと、「有21」の統制番号が書かれた製品をいただきました。さらに、当時使用していた「有21」のゴム版が見つかり、それも併せて寄贈していただきました。おそらく全国でも極めて珍しいものだと思われます。

藤本さんからさらにもう一点、大変面白い資料を提供していただきました。箱入りの酒器セットで、紙製の箱には「帰朝紀念独酌器」とあります。それぞれの高台内には蘭のマークがあり、香蘭社製というのがわかります。器の胴部には日本やアメリカ、イギリス、フランスなどの国旗がはためいています。

香蘭社製酒器セット（藤巻製陶所蔵）

これは海外へ渡航し、帰国した折の記念品として知人に配られたものが残っていたのではないかと推測されます。「肥前陶磁史考」によれば、昭和３年９月20日に欧米陶業視察を終えた香蘭社副社長の深川隆氏(十代深川栄左衛門)が、昨２年10月から佐賀県技師の大須賀眞蔵氏に同行し、イギリス・フランス・ドイツ・オーストリア・チェコスロバキアなどを巡回してアメリカへ渡り、つぶさに各地の陶業を見学したことが記されています。製品の作りなどから、おそらくこの折の品ではないかと思われます。

ひとつの企画展に対し、さまざまな話題が寄せられました。これもみなさまの関心が大きかったことの裏づけでもあるかなと思います。

開催にあたり、日本陶業連盟始め多くのみなさまのご協力、ご助言をいただきましたことに改めて感謝いたします。

（尾﨑葉子）

季刊 皿山 No.80 冬 2008

有田町歴史民俗資料館・館報

有田町歴史民俗資料館開館30年企画

「守り抜かれた伝統 ～戦時中の有田焼」 座　談　会

平成20年10月27日(月)に生涯学習センターで、深川巌氏(深川製磁相談役)、村島磯雄氏(元香蘭社 ロクロ師)、樋渡由治氏(香蘭社常務)のお三方をお迎えし、戦時中の有田焼業界の話などを伺いました。

座談会当日の様子

司会

深川さんはお父上の進社長から戦時中のお話などを伺っていらっしゃると思いますが、当時の深川製磁ではどのような焼き物作りが行われていたでしょうか。

深川

深川製磁では、一つは海上自衛隊から「硫黄島の洞穴の中から深川製磁の製品が沢山出てきた。マークが深川のマークで元に返そう」と一部を返していただいたものをここに持ってきました。焼き物としてはマルギ製品と比べて粗末ですが、昭和17、18年というのは学徒動員の人たちによって作られたものです。マルギ製品もありましたので、持ってまいりました。大きいものもありましたが、家や工場にサンプルとして残っていました。

国を挙げての戦時体制ということで、職人さんは軍需工場に徴用されるということがあり、陶工や職人さんを守るという意味でマルギという制度が出来たと兄が言っていました。

司会

マルギ製品の中には、香蘭社製だけれど今右衛門窯風というか、そのようなものがありますが、職人さんは移動があったということでしょうか。

深川

そうです。今で言うプロ野球の選手みたいなもので、職人さんは一年または二年契約というかたちで、(窯元では)12月31日というのは徹夜で職人さんを確保して、翌年の工場の作業に参加していただくというような形態でした。ですから、ある職人さんが前は今右衛門窯にいて、翌年は香蘭社にという風に。

司会

マルギと呼ばれている技術保存の措置をとられた所はもう一社、満松製磁がありました。残念ながら満松さんの所の製品は1点も残存しておりませんでした。

今回、日本陶業連盟所蔵の作品は初めて皆様に見ていただくわけですけれど、実は以前、名古屋にあります日陶連でこのマルギ製品を見たことがおありだという樋渡さんは、どういう感想をお持ちだったでしょうか。

樋渡

実は15、6年前でしょうか。ご存知のように私どもの会社は岐阜県に工場を持っておりまして、そこの責任者が意匠センターに研修生として行って、「日陶連にはたくさん戦時中の香蘭社の製品がある」ということで訪ねました。その当時にできたのかなと思われる位に精密で、繊細な焼き物が鎮座しているということに驚きを覚えて帰ってまいりました。これはもらえないのかな、返してはくれないのかなあと思い、呟きながら拝見したことを思い出しております。

司会

昭和17年当時、全国の焼き物産地に声をかけ、技術保存審査会をするので製品を出させ審査をしたとあります。この当時、香蘭社でデザインを担当されていたのが水町和三郎さん、柿沢市郎さんたちで、柿沢さんは金沢のご出身で、当時神奈川県横浜にあった宮川香山の工房で働いていた方です。水町さんのご紹介で有田に来られ、昭和10年ごろは香蘭社美術部主任をなさっていたようです。

樋渡さんはこの水町さんや柿沢さんのデザインなどを見てこられたと思うのですが、そのデザインを見て感じられること、またこのデザインというものが現在も香蘭社の製品として繋がっているのでしょうか。

樋渡

昭和36年に香蘭社に入社しました時には、柿沢先生は工場長として在職中でした。それから退職なさるまで7、8年。その後、顧問、相談役ということでわたしどもをご指導いただきました。柿沢先生のデザインは非常に繊細な絵で、今回展示中の作品の中にもおそらくこれは柿沢先生のデザインではないかという作品が何点もあるような気がしております。繊細というか、柔らかいというか、例えば、道端に一輪の花が咲いていればそこに座り込んで実写をなさる、精密描写をなさる。お亡くなりになった時に、たくさんの蔵書としてデザイン、スケッチブックをご寄贈いただきました。それを今でも使わせていただいている、あるいはヒット商品として構図を微妙に変えたり、

あるいは色の感じを今風に少し変化を持たせながら器にはめ込む、そういったことをさせていただきながら今でも先生の力をお借りしているというのが現状です。

宮川香山はもちろん、皆さんご存知のように板谷波山とも関わりがあられた方で、一方では非常に大胆な絵柄も残していらっしゃいます。そういったことで、強弱併せ持ったデザインをなさる方ではなかったかと思います。非常に熱心な方でして、夜中でもフト思いつけばごそっと起き出してデザイン帳に書きあげる。あるいは旅行すればスケッチブックを離さない。工場長としての会社運営とデザイナーとしての力を発揮していただいた方だと思っております。

司会

ロクロ師として戦時中の先輩方のお話を聞かれている村島さんですが、ロクロ師というのはどのような作業から始まったのでしょうか。

村島

昭和17年に、町立の有田高等実業青年学校に入り、一年生の時に毎週木曜、金曜午後二時間ずつ指導を受けました。一年生の時は絵付け、彫刻を勉強し、ロクロは土こね３年といわれますので、土こね3年ロクロ10年といわれるように非常に年季のいる仕事です。菊もみともいいますけれど、菊の花みたいにきれいに形がなるには３年くらいかかる。２年生の時に延べ下げ、車(ロクロ)の蹴り方。当時は蹴りロクロですから、今のように電動ではなく、ハマから稽古をしました。３年生では焼き物、茶碗の延べ方の基本を習った。このハマ作りと一口でいっても物凄く難しくて、延べ下げをするだけでも三ヶ月くらいはなかなか上手くいかない。蹴りロクロは蹴ったら体が動く。足を小さく動かして上体を動かさないで作業しなければならない。大変な労働です。

その後、終戦になって父が香蘭社に勤めていましたので、「お前は学校でロクロば習っとったけん、シャークニンになれ。今からは技術を身につけていたほうが給料も高いし、生活も安定してよいから職人になれ」と。10月に香蘭社に見習いとして入り、1、2年はハマ作りです。ただ、学校で習っていたお陰で、その日から土こねが出来て、延べ下げしてハマができました。最初は一日に2～300つくればいいのですが、先輩の職人さんから「ハマ切りも一日1000は切らんば一人前じゃなか」といわれました。3年目くらいから盃を作り始めました。香蘭社の盃は薄い盃で、数が多い。今は棚積みで積みますが、そのころは丸いサヤに飯碗を入れたら隙間に、盃を積め込む。そうして焼けば燃料費が出てくる、窯焚き賃が出てくる。２年くらいは盃ばかり作っていた。3年目くらいから煎茶碗、小鉢、中付けと色々、徐々に大きく作るようになりました。

24年、(昭和)天皇が戦後初めて巡幸に来られたときに丁度初代の奥川忠右衛門さんがいた。そこで５尺の花瓶、高さが１メートル50センチ、径が2尺2寸ぐらいあった。それを5つのパーツに作って継ぎ合わせる。それを２本作られたが、１本はきれいに継ぎ合わせて出来上がった。今のように電動でなく、蹴りロクロで、そりゃ見事でまさに神業ですね。花瓶作りというたら今の硬度計で計れば11から12。指が入らん位硬かった。小物は9くらいで作った。今でいう真空土錬機というものはなかった。

忠右衛門さんはずっと香蘭社にいたわけではなかった。半年くらい香蘭社で花瓶を何十本か作って、また数ヶ月か他所に行き、また半年目かに香蘭社に戻ってきて3ヶ月という、注文のある分を作っていた。５尺の花瓶を作るのを見た人は今、余りいないんじゃないかな。

その後、30年代にずっと景気がよくなって手作りでは間に合わない。機械で出来るものはどんどん機械に代わっていきました。細工人さんも年齢的に辞めていかれて、中には香蘭社よりも待遇のよい所があったので、そこに引き抜かれた人もいた。そういう風で、最後に私が一人ロクロ師として残った。ずっと作ったのが展示品の中にもあった丸の飯碗の「もうりゅう」。これだけは手で作らないと機械では絶対できん。会社を辞めるまで「もうりゅう」だけを作っていました。

司会

今村島さんがお話になった細工人さんたちによってマルギの製品も作られたのだろうと思います。戦時中は手榴弾や陶貨のようなものも作っていますが、そういうものは進駐軍が来るということで書類は燃やし、製品は壊して埋めるということで、実は戦時中の記録というのは余りない。先ほど昭和30年代のお話をされましたが、戦後、沢山の洋食器の輸出に携わってこられた深川さんですが、どのような状況でしたか。

深川

先ほどお見せした海軍の食器ですが、印判手です。下絵を印判で錨と桜のマークを染付したのが海軍の兵食器でした。そういう印判手、量産品やマルギ製品で成り立っていたようなところで終戦を迎えた。そこでさて、何を作ろうかということだったが、そのころは食料品は何もなくてどうしようもなかった時に、私の大学時代に朝鮮戦争があり、昭和27年に卒業したのですが、当時米軍即ち国連軍はプサン付近まで退却した時期で、それが佐世保の相浦海兵団に上陸してきた。その兵隊さんに日本の特産品といわれる焼き物を持っていったら飛ぶように売れ、大学卒業だから英語が出来るだろうと思われ、全然英語なんか知らないのにその最前線でお前売れということで、相浦に行ったわけです。海軍の水夫ですけれど世界中に行くことが出来るということ、それに世界の物品が税なしで安く手に入るということで、家族が大事で特に焼き物は家族的な商品に見え、何でもいいから欲しいということで、最初はティーセットから、その後すぐディナーセットになって相当売った。一番売ったときが一日トラック一杯売り切れるということを毎日やっていた。

朝４時ごろから起きて箱詰めして、相浦までトラックで運ぶ。それも戦時中のトラックの木炭車ですね。戦後はそれからの出発でした。

（文責：資料館）

日本の伝統美と技の世界

第16回重要無形文化財保持団体秀作展

オープニングテープカット

前号の表紙で紹介した上記の展覧会が９月３０日から１０月６日まで佐賀玉屋で開催されました。

この秀作展は全国１４の重要無形文化財に指定された保持団体が行う総合的な展示会で、重要無形文化財の普及と振興を図るため、毎年、各加盟団体の所在地において持ち回りで開催されています。有田町からは柿右衛門製陶技術保存会と色鍋島今右衛門技術保存会が指定されおり、今年は有田町の担当で、佐賀市で開催しました。この他に、越後上布・小千谷縮（新潟県）、結城紬（茨城・栃木県）、細川紙（埼玉県）、輪島塗（石川県）、本美濃紙（岐阜県）、伊勢型紙（三重県）、石州半紙（島根県）、久留米絣（福岡県）、小鹿田焼（大分県）、久米島紬、喜如嘉の芭蕉布、宮古上布（以上、沖縄県）が重要無形文化財保持団体の指定を受けており、選び抜かれた作品が展示されました。

会場では、４団体による製作実演も行われ、柿右衛門窯、今右衛門窯の職人による線書きや濃みの繊細さ、石州半紙の手練の技、久留米絣の計算された技に感嘆の声が上がっていました。多くの観覧者がつめかけ、６日間の合計入場者数が８，４６６名にものぼり、ある製作実演者は「こんなにお客さんが多いのは初めてです。」と驚いていました。観覧者の方が実演者に質問をし、気軽に応えるなど和やかな雰囲気で、多くの観覧者の皆様に伝統工芸の素晴らしさと大切さを感じ取っていただき、この秀作展の目的は充分達成したものと思います。　（宮﨑光明）

会場の様子

●新刊紹介●

当館ではこのほど開館30年企画「守り抜かれた伝統～戦時中の有田焼」展開催にあたり、図録を発行しました。昭和17年当時に焼かれた有田焼・マルギ製品の120点と、当時一般的な製品だった統制番号が付いた有田焼などを紹介しています。

残部も少なくなりましたが、ご希望の方は有田町歴史民俗資料館で販売しておりますのでお求めください。

・装　丁
　　Ａ４版　５９頁
・掲載点数
　　マルギ製品１２０点
　　参考資料　　１５点
・販売価格
　　１，０００円

紅葉のライトアップ

１１月の有田町歴史民俗資料館周辺は紅葉が見ごろとなります。今回、企画展開催にちなみ、１１月２２日（土）、２３日（日）の両日、有田町役場有志の協力を得て、ライトアップを行いました。同時に、初の夜間開館を行いましたが、これは紅葉の美しさと伝統の技を共に見学していただこうと実施したものです。

館の周囲の紅葉は昭和３２年ごろに国土の荒廃を憂えた人々によって植栽されたものですが、近くにある国の天然記念物に指定された大いちょうも見ごろを迎え、泉山の秋は最高潮に達しました。

ライトアップの様子

季　刊　『皿　山』

通巻 80 号（平成 20 年 12 月 1 日）

編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1

☎ 0955-43-2678　FAX0955-43-4185